人間性の探究

第6回 オランダ植民地支配と東インド①

2020年度前期

1

*オランダの東インド支配(1602年~1949年:およそ350年間)

【第1期】オランダ東インド会社による植民地経営の時代 (1602~1789) 【第2期】オランダ政府による植民地支配の時代(1799~1949)

※途中、1811~1816年はイギリスによる支配、1942~1945年は日本軍に よる占領

・「**蘭領東インド**」=現在のインドネシア共和国全域を指す ただし、オランダが名実ともにこの地域全体を支配するようになったの は1915年以降。

【第1期】

オランダ東インド会社による植民地経営の時代(1602年~1789年)

*オランダ東インド会社

・1602年:各州のいくつかの航海会社が合併し、「連合東インド会社」 (Verenigde Oost-Indische Compagnie)を設立

※オランダ東インド会社に与えられた特権

「喜望峰の東からマゼラン海峡の西まで」の範囲内で、貿易・航行の独 占、条約の締結、要塞の構築、貨幣の鋳造、兵力の保持と自衛戦争の遂行、 長官・行政官および軍事指揮官の任命と罷免、裁判官の任命および罷免、 刑罰の実施など(=準国家的な権限)

3

※オランダ東インド会社の組織

・オランダ本国

...6つの支部(カーメル)と「17人会」(最高重 役会)

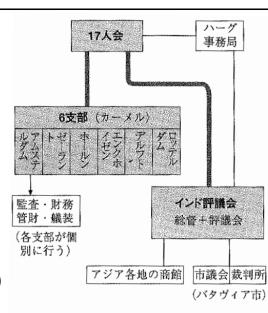
…資金調達、意思決定を行う

・東インド(バタヴィア)

...1619年に東インド貿易の拠点として城塞 都市バタヴィアを建設

...「インド評議会」(「総督」と「評議会」) を設置

商館への指導・監督を行う



羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社,2007,pp.103

※東インド会社の東インド進出の当初の目的

= 港市を拠点とした海上貿易独占による利益獲得

(領土獲得や法の施行は必要最低限、原住民の慣習には基本的に不介入)





永積昭『オランダ東インド会社』 講談社,2000,p.94

5

- ・しかし、18世紀になると香辛料貿易の不振、私貿易の増大、会社内部 の腐敗などにより赤字経営
- →次第に、直接的に領土を支配し、商品作物(コーヒーやサトウキビ、藍など)を強制供出させる方針へと転換

※「陸に上がる」

・ジャワ島とマドゥラ島を中心に 直接的な領土支配へ





*オランダ東インド会社によるジャワの領土獲得の流れ

※ジャワのマタラム王国(16世紀~18世紀)

- ・1586年、ヒンドゥー教国マジャパヒトの滅亡後、イスラーム教国として ジャワの内陸部に成立
- ・農業国家として発展(「陸のマンダラ」国家)
- ・17世紀前半までにはバタヴィアとバンテンを除くジャワ全土を支配



7

- ・1628~1629年:マタラム王国はオランダ東インド会社の拠点バタヴィアを包囲攻撃→しかし失敗
- ・1646年:国王アマンクラット1世がオランダと平和条約を締結
- →オランダは毎年、マタラム王国に使節を派遣して貢物を献上すること (=マタラム王国はオランダの貿易独占を事実上認める)
- ・1678年:国王アマンクラット2世の時、反乱鎮圧にオランダが協力(トゥルーノジョヨの反乱)

→オランダは、アマンクラット2世をマタラム王と認める代わりに、バタヴィア領拡大、スマラン割譲、王国全土での関税免除、織物・アヘンの輸入独占、米・砂糖の買い付け独占などの特権を得る

「1678年にはヒュルトの率いる討伐軍がクディリの町に拠るトゥルーノジョヨ(マタラム王に対する反乱の首謀者)の軍を破った。オランダ軍はマジャパイト王朝から伝わるマタラムの王冠を神器(オランダの史料によれば、短剣、やじり、上衣から成る)と共に奪回し、この王冠はやがて神聖な儀式と共に、アマンクラット2世の手に戻されたが、この時オランダ側のタク少佐が、王に先んじて王冠を試しに自分でかぶってみてから渡したというエピソードが残っている。別の説によれば、彼は王冠のうちの最も高価な宝石を抜き取ってから帰したとも伝えられている。・・・」[永積2000:162]

- →以後、ジャワの王権はことごとくオランダの承認と保護とを必要とし、 それを得た者のみが正統性を主張し得るようになる
- →王権に対するオランダの干渉は、ジャワの民心をはなはだしく離反させ、 民衆は外来者の保護に頼る正統の王よりも、その敵である不遇な王位継承 権者の方にひそかな同情を寄せるようになる

9

その後...

・1704~1757年:3度の王位継承戦争にオランダが介入

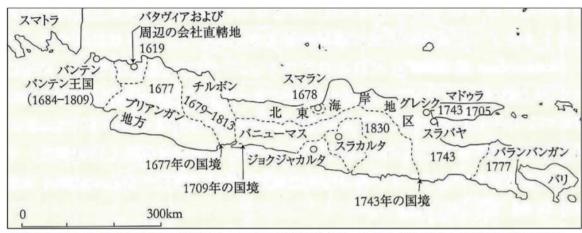
(第一次:1704-1708、第二次:1719-1723、第三次:1749-1757)

- ・第三次王位継承戦争の結果、マタラム王国はジョグジャカルタとスラカルタの2つの王家(最終的には4つの王家,1813)に分割され、「王侯領」となる(=ギアンティ条約)
- …実質的な支配権をオランダに譲渡
- …マタラム王国は統一王国ではなくなり、オランダの保護領として自治権をもつにすぎない存在へ

(※同様の経緯は、西ジャワの強国バンテン王国でも見られる)

*オランダ東インド会社によるジャワとマドゥラの支配

図1 東インド地図(数字はオランダによって領有された年)



出典: 大橋厚子『世界システムと地域社会―西ジャワが得たもの失ったもの1700-1830』、京都大学学術出版会、2010 年、33 頁。

11

11

【第2期】オランダ政府による植民地支配の時代(1799年~1949年)

背景①:18世紀頃~東インド会社は赤字経営化

…香辛料貿易の不振、社員による私貿易の増大、会社内部の腐敗(専制主義的な運営、 経理非公開、恣意的な配当など)

背景②: オランダ本国の政治情勢の変化

- ・フランス革命の影響で、ネーデルランデン連邦共和国(1609/1648-)の実質的な君主オ ラニエ公ウィレム5世を追放 (イギリスへ亡命)
- ・1795年:フランス軍と結んだ共和派により、バタヴィア共和国成立
- ・ウィレム5世は東インド会社に書簡を送り、主権をイギリスに移譲するよう命令するも、会社指導部は拒否

⇒1799年:バタヴィア共和国政府と議会は東インド会社解散を決定

→東インドは共和国の直接支配下へ(会社の資産と債務は共和国に継承)

*その後のオランダ本国の政治状況と東インド支配

・1806年:ナポレオンによるオランダ征服

→オランダ王国成立(国王:ナポレオンの弟ルイ)

・1810年: フランス帝国の直轄領となる

→オランダ王国は一時消滅し、東インドはイギリスの支配下に(1811-1816) ※イギリスの植民地官僚ラッフルズによるジャワ・マドゥラの改革

・1815年:ナポレオン没落後のウィーン会議により、オランダ王国復活 (=立憲王国)

→東インドはイギリスからオランダに返還

13

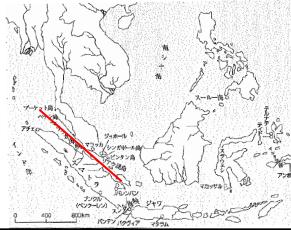
13

・1824年:「英蘭協定」により植民地を分割

…スマトラにあったイギリス領のベンクーレンと、マレー半島のオラン ダ領マラッカを交換、ボルネオ島については決定を留保

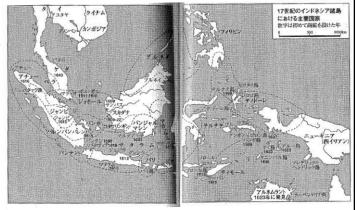
…マラッカ海峡を境界とし、マレー半島側はイギリス領、スマトラ島側はオランダ領とする(ただしマラッカ海峡は運航自由)

→のちのマレーシア・インドネシアの国境線の画定



*オランダ王国(1815-)による東インド支配の仕組み

・ジャワ島とマドゥラ島を中心に支配 (⇔その他の地域は「外領」として、 比較的緩やかな支配)



・ジャワとマドゥラを、理事州(17)→県(約80)→郡(約400)→村(2万以上)に分ける …イギリス占領時代のラッフルズによる改革(地方行政や司法制度など)を基本的に継承

15

15

*オランダ王国(1815-)による東インド支配の仕組み

※伝統的な支配機構を利用した「間接統治」の形式

<オランダ人行政官>

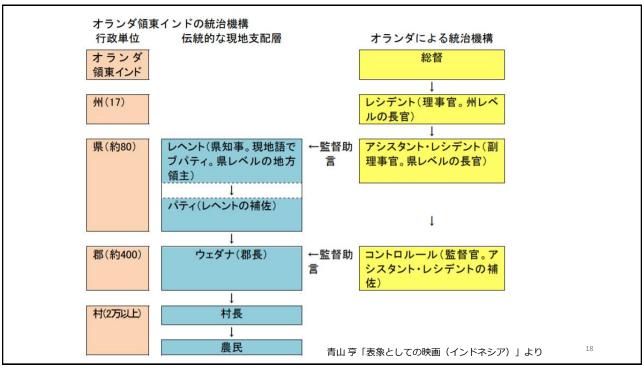
・総督(中央レベル)→レジデント(理事官, 州レベル)→アシスタント・レジデント(副理事官, 県レベル)→コントロルール(監督官)

<原住民行政官(pangreh praja)>

- ・レヘント/ブパティ(県知事)→パティ(レヘント/ブパティの補佐)→ウェダナ(郡長)→ 村長
- …マタラム王国時代の封建的支配階級を有給の官吏へと転身させる 土着の「支配者」としての正統性をもつ(賦役労働や生産物の徴収権)
- ※約2万人の東インド陸軍兵を配置 (兵士の6割は原住民)

17

17



*オランダによる東インド支配の実態

- ※「強制栽培制度」(Cultuur stelsel = 耕作制度)
- ...1830年にジャワで開始された農業経営制度(~1870年頃まで)
- ※背景として、反オランダ武力闘争鎮圧のための戦費負担(1821~37年頃のパドゥリ戦争、1825~30年のジャワ戦争など)や、ベルギー(工業地域)の独立(1830)などによる財政難
- ・耕地または労働時間の5分の1で、世界市場向けの商品作物(コーヒー、サトウキビ、 藍など)を住民に栽培させる
- ...オランダ政府が一方的に定めた低い価格で買い上げ
- ...原住民地方行政官を通して村単位で管理
- …原住民行政官にも収益を配分
- ・世界市場への輸送・販売は「オランダ商事会社」(1824年設立の国策会社)に委託し、 アムステルダムで競売
- →仲買人を通してヨーロッパ各地に再輸出

19

※「強制栽培制度」(Cultuurstelsel)

- ・オランダ本国に莫大な利益を生む
- ...1856~65年頃には経常国庫収入の5割を超える
- →各種の消費税撤廃、インフラ整備への投資を賄う(北海運河や水路の工事)

→オランダの産業革命を促進

栽培労役の負担農家の割合(%)					
コーヒー	40.4				
藍	18				
サトウキビ	13				
タバコ	0.7				
シナモン	0.7				
胡椒	0.4				
茶	0.3				
洋紅	0.2				

強制栽培の作物別収益構成(%)					
コーヒー	76.8				
砂糖	15.6				
藍	5.3				
茶	1.8				
胡椒	0.2				
洋紅	0.2				
シナモン	0.1				
タバコ	0.03				

青山 亨「表象としての映 画(インドネシア)」より

20

表 2. ジャワの輸出入 1835-65年

		(単位 100 万グルデン)			
		1835	1845	1855	1865
	診 輪 出 刻	32.2	64-5	78-3	101-4
翰	オランダ向け	22.3	48.0	60.2	80.9
	砂塊	5.8	20.3	20.5	32.4
出	2 - 6 -	14.0	20-1	32.4	83-7
	规范	1.0	5-0	3.0	4.2
	能輸入額	17.8	27.1	33-0	48.G
翰	オランダより	4.3	9.6	11.7	31.8
	廃・鉛製品	41	10.9	14.4	14.2
	オランダより	1.7	6.6	7.7	7.2

(注) 1グルデン=1/12ポンド

(資料) G. F. De Bruija Kops (ed.), Statistiel van den handel en de scheeptvaart op Java en Madura, 1825 - 1865 (Batavia, 1857 - 69).

1.5

石坂昭雄「ムルタトゥーリ『マックス・ハーフェラール,もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』とその時代: オランダ近代 史の光と影」「札幌大学総合論叢 」(36), 2013,p.202

5.3

6.6

6.3

4.7

6.0

21

表 3. ジャワへの綿製品輸出 (グルデン)

	イギリス	オランダ1)	フランス	アメリカ 合衆国	ハンブル ク	総額	
1829	1,562,760	3,485,079		400	43,113	5,091,352	
1830	1,395,030	2,373,309	2,271	9,377	57,495	3,837,482	
1831	1,473,372	1,389,905	475	34,508	11,838	2,910,098	
1832	1,798,880	67,240	21,880	11,378	8,904	1,908,282	
1833	3,813,063	90,172	6,989	8,849		3,919,073	
1834	3,978,103	330,489	24,880	40,859	7,336	4,381,667	
1835	2,435,369	1,549,744	107,378		11,644	4,104,135	
1836	2,838,012	3,280,655	17,211		1,055	6,136,933	
1837	3,303,279	3,678,740	29,923	23,760	14,375	7,050,077	
1838	3,783,014	5,775,321	24,442	75,007	4,355	9,662,139	
1839	2,984,314	7,304,258	57,503	90,250	22,667	10,458,992	
1840	3,975,599	8,895,117	41,217	20,709	60,399	12,993,041	

1) 1829-31 は、ベルギーを含む

Muller (1857) ,84-91 ; Van der Kraan (1998) ,22,25,53

図4 オランダ商事会社の特権や商業独占に対する 風刺画 (1824年)

Romein/Romein-Verschoor (2006), 639



石坂昭雄「ムルタトゥーリ『マックス・ハーフェラール,もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』とその時代:オランダ近代 史の光と影」「札幌大学総合論叢 」(36), 2013,p. 201-202

※「強制栽培制度」によりオランダが莫大な利益を得た一方、

東インドでは...

- ・取り決めの「耕地または労働時間の5分の1」は有名無実化、水田を潰して 商品作物が栽培される
- →住民への過度な負担により大飢餓が発生 (1848-1850中部ジャワなど)

「飢餓?十二分に豊饒さを祝福されているはずのジャワに飢餓とは?然り、読者諸君、 わずかの歳月の間に、数多の地方が飢餓に倒れた。母は食物のために子どもを売物に 出した。母がわが子を食べたのである…」

(ムルタトゥーリ『マックス・ハーフェラール』より, 梅原悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系6 東南ア ジア教育史』講談社, 1976, p. 56)

→その後、商品作物の生産・ヨーロッパ製品の市場化により、東インドは植 民地経済システムへと組み込まれていく

23

*オランダ国王ウィルレム三世(1817-1890)のオランダ国会開院式挨拶演説 (1849年9月15日)

「朕は、わが国の財政収入がこのうえなく満足すべき状態にあることを 感謝の念をもって認める。そして、その少なからぬ部分が、わが国家の 東インド領土から上がる利益の果実によりもたらされていることを十分 に熟慮している。さすれば、朕が、この領土の繁栄と発展を促進すると いう自らの使命をあだやおろそかに思うことは決してない。・・・ の目的のため、そしてそこでの支配権を維持するためには、必要な犠牲 を払うことを決して惜しんではならない。」「石坂 2013:223]

- ※「強制栽培制度」による莫大な経済的利益と、キリスト教文明による啓蒙と いう論理による支配の正当化
- ※オランダの多くの国民は、東インドにおける「犠牲」(搾取の実態)を知らな かつた?

*オランダによる東インド搾取への批判

※ダウエス・デッケルの小説『マックス・ハーフェラール』(1860)による内部 告発

- ・オランダ人植民地官僚ダウエス・デッケル(1820-1887)
- …1838年(18歳のとき)にオランダからオランダ領東インドに渡り、植民地官吏 として各地で勤務
- … 1852年に一時帰国。1855年に植民地にもどり、翌年 ジャワ島西部のバンテン南部ルバック県の副理事官に 任命される
- …そこで目撃した住民の悲惨な生活に憤って辞職
- …帰国後、自身の経験にもとづき、ペンネーム 「ムルタトゥーリ」(ラテン語で「私は多くを堪え忍んだ」) の名で自伝的小説『マックス・ハーフェラール』を執筆・出版

版

25

* ダウエス・デッケルの小説『マックス・ハーフェラール』(1860)

- ・オランダの植民地支配による原住民搾取の実態を告発する内容
- ・あらすじ

…理想に燃える若きオランダ植民地官僚で、セレベス島メナドの副理事官であったマックス・ハーフェラールは、急死した前任者の後継として、ジャワ島西部のバンテン南部にあるルバック県の副理事官に新たに赴任し、そこで、オランダ人植民地官吏と現地首長が結託して農民たちを搾取しているのを目の当たりにする

…マックス・ハーフェラールは農民を救うために改革を試みるも叶わず、また総督への直接の訴えも聞き入れられなかったため、職を辞して失意のまま帰国。その後、自身の体験に基づいて世間に現状を訴えるため、小説を書く



27

*『マックス・ハーフェラール』中の挿入エピソード:「サイジャとアディンダ」 ※ルバック県の農村の若い男女、幼なじみで許嫁同士のサイジャとアディンダの話

- ・農民であるサイジャの父は、水田での仕事のために水牛を一頭持っていたが、水牛 は原住民行政官のパティに取り上げられてしまった。水牛なしでは田を耕すことがで きず、家族を養うことも地税を払うこともできないため、父は家宝のクリス(神聖な 剣)を中国人に売り、そのお金で新しい水牛を買った
- ・幼いサイジャはその水牛と心を通わせ親友のようになったが、この水牛もまたやが て取り上げられてしまった。サイジャの父は蚊帳の吊りかぎ2つを中国人に売り、その 金でもう一度水牛を買った
- ・やがてサイジャは今度の水牛とも仲良くなり、野生のトラに襲われそうになったと きには水牛に命を救われた。しかし数年後には、その水牛もまた取り上げられて屠殺 されてしまった

- ・サイジャの父にはもう売る物もなく、母は悲しみのあまり世を去った。父は 絶望し、ボゴールの方に出て職を求めようとルバック県を後にしたが、通行証 を持たなかったために警察に連れ戻された。父は鞭打ちの刑を受けて獄につな がれ、その後獄中で死んでしまった
- ・父が家を出た後、15歳のサイジャは水牛を2頭買うためのお金を稼ぐため、都バタヴィアへ行くことにする。出発の前、サイジャは許嫁アディンダと、月が新しくなるたびに臼に線を引き、36本の線が引かれたらチーク林のクタパンの木の下で再会して結婚することを約束した
- ・3年近くの間、サイジャはバタヴィアの金持ちの家で勤勉に働き、お金を貯めた。約束の日が近づくと、彼は職を辞して故郷に戻り、約束の日の朝にクタパンの木の下でアディンダを待ったが、彼女は現れなかった。村民の話では、アディンダの父もまた水牛を取り上げられたため、地税を納めないことで処罰されるのを怖れ、家族を連れてルバック県の海岸部チランカハンへ行き、そこから同じく罰を恐れて逃げてきた人々と共に船でスマトラ島の南端スマンカ湾を目指したという。村中を回って、以前はアディンダの持ち物であった臼を見つけたサイジャは、そこに32本の線を数えることができた

- ・サイジャはアディンダを探すため、海岸部のチランカハンで漁師から船を買うと数日かけて海を渡り、スマトラ島のランプンに入った。ランプンではオランダの支配に反抗する叛乱者たちが闘争を続けており、サイジャもまたバンテン人の叛乱者集団に身を投じた。しかし彼の目的は戦うことではなく、アディンダを捜すことだった
- ・ある時、叛乱者側がまた戦いに敗れ、サイジャはオランダ軍に奪われたばかりの、まだ燃え盛っている村の中をさまよっていた。その村で壊滅した叛徒の大部分はバンテン人であった。サイジャはまだ燃やし尽くされていない家々を亡霊のように徘徊し、その一軒の家で胸をサーベルで深々と刺されたアディンダの父の死骸と、アディンダの弟たちの死体を見出した。ふと少し離れた場所に横たわっているもう一つの死体に目をやったサイジャは、それがアディンダのものであることに気付いた。彼女は素裸にされ、目を覆いたくなるようなやり方で惨殺されていた
- ・突然そこに、数人のオランダ兵が、残った叛徒を掃討するために入ってきた。 サイジャはとっさにオランダ兵の銃剣を自分の胸に引き寄せてかき抱くと、力 いっぱい自分の身体でオランダ兵を押し戻した

*小説『マックス・ハーフェラール』が社会に与えた影響

- ・出版されてしばらく後、オランダを含むヨーロッパ各地で大反響を呼ぶ
- →収奪に対する反対世論が盛り上がり、「強制栽培制度」廃止のきっかけの一つとなる (1860年代から段階的に廃止)

→のち、オランダ人個人資本による自由主義的農園経営、1900年代の「倫理政 策」へと政策転換

- ・のちに東インドでも読まれ、民族主義者たちに影響を与える
- ・『マックス・ハーフェラール』は近代オランダ文学の 最高傑作とされ、1976年に映画化も (「Max Havelaar」)

31

31

参考文献

- 石坂昭雄「ムルタトゥーリ『マックス・ハーフェラール,もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』とその時代 : オランダ近代史の光と影」「札幌大学総合論叢」(36), 2013,pp.197-223
- 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社,1992
- 永積昭『オランダ東インド会社』講談社,2000
- ムルタトゥーリ『マックス・ハーフェラール―もしくはオランダ商事会 社のコーヒー競売』(佐藤弘幸訳), めこん, 2003